



No.32 (通No.111) 2023年6月21日

てつがく なかにわ

## LEE'S レター 哲樂の中庭 2023年夏至

季節のごあいさつに代えてリーズからおとどけするただ一つの通信

## 「セクシャリティーって」

LGBT 法案が、問題点を指摘されながら成立しました。そこで思い出すこと二つ。

LGBTの人たちの支援を始めた女性起業家と話していて聴いた印象的な一言。「今わたしは男性を好きですが、でもいつ女性を好きになるかわからない。セクシャリティーって、そういうものだと思うんですよ。」

男性を好きな10代の男性。数年前に明確に公言して、まわりの皆も合点。最近個別に話したときに彼が言ったこと。「20代に出会って、この人は自分が守っていくと決めたから、これからは勝手に守っていく。」

前者では“そんな概念はもったことなかったなあ…”、後者では“さて、わたしは…”。

自分の未熟さを覚った二つの場面です。

## 7月9日に「拠点ゼミ」

「女性チャレンジ応援拠点」今年度のテーマは『知-ス-アップ（言うは易く行うは難し）』、その一回目は「信頼関係をつくる」。日常に追われる日々に、ちょっと〈われにかえる〉時間をつくり、思考と姿勢を整え、また明日にかけるゼミ、いかがですか？

●日時：7月9日（日）10：00-

●場所：クレオ大阪中央館

\*6/21 現在 Web サイトにトラブルあり、しばらくしてご確認を。



LEE'S (リーズ)

〒541-0046

大阪市中央区平野町1-7-1

堺筋高橋ビル5F Tel. 06-7164-0937

大阪 NPO センター RS B507

リー・ヤマネ・清実

Lee Yamane Kiyomi



## しっかり休みましょう、仕事のためにも

生成 AI、誰でも使えるようになったので、試した方も多いでしょう。使ってみると、よくわかりますね、もう本当に実用的なものになっていく、使わずにはおれなくなる。問題は悪事もしやすくなる。

5月30日付日経エコノミストのコラムにはAI分野のスタートアップ企業トップが核拡散防止のような世界機関の必要性を語ったと載っていました。それほどのものだということを開発者たちはわかっている。

規制までには時間がかかり、今は「着手先行」状態の生成AI。知人によると、つい最近出会ったある専門家の人はコラム執筆にAIを使っていると話していたそうです。

8割がたはAIで作って、それをひな形に自分の視点を入れる。これまでは人間の8割がたの思考作業が2割程度になる？ 思考作業は頭脳の試行作業でもあって、これが考える力を鍛えたはず

で、そのうち“ま、いいか、AIのつくったもので…”となっていってしょうね。

ところで考える力もさることながら、もっと気になるのは、人間の感覚。特にものごとの微妙な変化や〈気配〉を感知、察知する力はどうなっていくか。

古代の「孫子」は『見分けのつかない微妙な形、勢』をみてとるのが重要といい、現代の数学者は『真に貴重な情報は〈流れの変化〉にある』（イヴァル・エランド）と言っていますが、微妙な変化を読みとって対処する先に、未来の刷新があるともいえる。

微妙な変化を感知、察知する力。その度合はどうぜん個人差もある。『人間はもともと音の知覚能力によって気配を察知し、身を守ってきた』（伊福部達）そうで、聴覚をふくめ五感がそのコンセントなのは確か。まずは五感を澄ますためにも、しっかり休んで、身心を解く。それも仕事のうちです、みなさん。

## | 見聞感考 | 「私の主眼は〈理解〉にある」

『戦争と平和 ある観察』（中井久夫 人文書院 増補改訂版2022年12月）を読みました。3月に神戸の「ギャラリー島田」で『ここを観る時代を観る—中井久夫さんを偲んで』があり、帰りに買った一冊です。

書名になっている「ある観察」は60ページほどのもの、他に個人史や対談 シンポジウムの様子も収録されています。だからライブな語り、意見、感想が載っている。おかげで、この超人の生い立ちと成り立ち、背景と興行、〈街なかに住む仙人〉ぶりをかみ聞かせることができました。

12項にわたって書かれた「ある観察」の結びはこうなっています。「私の主眼は〈理解〉にある。私は戦争という人類史以来の天災の一端でも何とか理解しようと努めたつもりである」。

続けて「あとがき」の初めには、「戦中派」と呼ばれる者として、「一度は書かざらねなかつたとも思う」とも。

読者としては、よくぞ纏めてくださったという想いです。広く深く調べていけば、特にネット検索できる今の時代、知り得ることも多いのですが、凡人にはその気力も能力も、まったく足りません。

展示をみせてもらった入場料代わりのつもりで買い、なにげなく読み始めた一冊ですが、“これは誰でも読んでおいたほうがいんじやないか…”と感じて、音声でも少し発信しました。

読んでみると、目に耳に頭、痛い。そこにわたしたちが陥りかねない姿があるから。読み終えたとき深くため息をつきましたが、社会観の次元は少し高まったと思います。知の文化遺産の一冊。